

# 田中研新聞

第42号

2017年  
2月10日発行

2016年12月10日号

甲南大学知能情報学部田中研究室 毎月発行  
http://carnation.is.konan-u.ac.jp  
編集長・岡田 航大(M1)  
編集委員・橋本 渉(B4)

# 卒論発表会無事に終了

## 卒論指導を終えて

今年度の卒業研究指導を終え、簡単に総括したいと思います。今年度は、ほぼ全員でKORoの制作にあたり、それに伴った卒論もKORoに関連するものとなりました。KORoの今年度の成果については、別の機会に詳しい総括をしたと思います。

それぞれの研究がKORoへの実装を伴うものでしたので、11月末までに実装を終え、その後は論文執筆に専念してもらうように指導してきました。それはほぼ実現できましたが、無人での連続稼働を行う際には、様々な問題点が出てきました。LeapMotionの電源が切れる、自動的に立ち上がらない部分がある、目が表示できないなど、研究テーマそのものではない問題点があつたからとら出てきました。それらの多くは岡田君が解決してくれ、図書館入口での無人稼働可能なロボットが一応出来上がったのは岡田君の功績が大きいと思います。

論文に関しては、厳しい目でチェックを受けた文書を残す訓練という気持ちで指導してきました。全体構成は良いか、後輩や他人が読んで必要な情報が書かれているか、読んでいて、不快な文体やフォーマットはないか、などに配慮して赤を入れしました。中には、何度指導しても同じような問題が別の個所にあっても全く改善しないものもあり、人の指導を受けるに値しないといわれても仕方ないものもありました。

Pを行うために、私は皆さんに、自分で予定を作ってもらいました。しかし、残念ながら、自分で作った予定でありながら、その半分も実現できない人がほとんどです。この卒業研究で、自分の能力や知識を客観的に把握することが曲がりなりにもできたと思えます。いや、そう期待します。今後、皆さんが社会に出て、仕事をするときには、自分の力量をしっかりと把握して、それに基づいて計画を立て、実行するということが必ず求められます。自分でできもしない計画を立てれば、期末のチェックで不可が付きまします。逆に、安全を見て、非常に簡単な計画にすると、やる気がないという評価が付きまします。Pができるためには、自分を知らなければならない、その意味で、卒業研究の役割があると思えます。

## 宮尾翔太

1月30日の卒業論文発表会の当日、家を出る前に、大きめのグラスに入ったコーヒートをブラックで一気に入らしたためか、胃がむかむかして気持ち悪いという症状になり、体調はすこぶる絶不調でした。

研究室に着いてからすぐ、卒業論文発表会が始まる寸前まで、プレゼンテーションで使用するパワーポイントの資料や発表文を考へ、文字の追加や訂正など



## 伊東一樹

卒論発表を終えて、この1年間本当に充実した時間を過ごせたと思います。

夏のオープンキャンパスで披露したのですが、当日全くうまくいかず本当に悲惨な結果になりました。秋のオープンキャンパスこそ挽回をと思ったのですがSegwayがバンクしてしまつたというトラブルが発生してしまい、披露することができませんでした。この件に関しては本当に悔しかったです。高校生の生の声を聞く大きなチャンスでしたし、自分のシステムがどこまでできていたのか本当の意味で把握するチャンスだったからです。しかしこのようなことがこれから生きていく中で何度もあると思うので今となればいい経験だったと思います。これまでこの研究を通して本当にたくさんの経験を積むことができました。ソフト



## 金澤陽介

卒論発表会で、自分の発表が終わった瞬間はとても達成感がありました。発表自身は多少満足できなかった部分もありますが、自分としてはまあまあ上手く話すことができたのではないかと思います。

卒論発表会を終えて、いろいろ大変なこともありましたが、最終的には、田中研究室に入っていて、「本当に良かった！」と心底思いました。皆さん、本当に有り難う御座います。(宮尾翔太)

を行っていたため、一応完成したという感じにしか思えませんでした。そのため、「こんな不安定なもので大丈夫なのだろうか」と自分の発表が始まるまで、相当緊張していました。しかし、いざ自分の番になって、皆さんを前にして発表をしていると、自分はあまり緊張していないことに気がきました。『卒業研究及び演習』の授業中に行う活動報告のほうに緊張しました。7分という発表時間を5秒ほど時間がオーバーしてしまいましたが、何とか発表することができました。研究室の他の皆さんの発表は、素晴らしい完成度で、感心させられてばかりでした。パワーポイントの完成度や発表態度は見習うばかりです。スライドの構成も然ることながら、分析や調査が非常に詳しく行われていて、卒業論文に対するとても強い意気込みが感じられました。他の研究室の発表は、上からの物言いで大変失礼ですが、目次やアニメーションなど、スライドの中に必要のないものまで入れてあり、聞いていてよくわからなかった人もいました。正直に言うと、あまり上手ではなかったと思います。

KORoの常駐でも、システムの不具合がなかなか治らず、岡田さんに何度も助けられました。卒業論文では、最初は書き方がわからず、何度も過去の卒論を見ながら、書き方を覚え直しました。研究内容を考え、プログラムを書き始め、論文としてどのように研究内容を書いていくのかといったところまで、田中先生や院生の方々の協力がなかったら、ここまでたどり着くことができませんでした。本当にありがとうございました。田中研究室で学んだことは、プログラムの知識や発表の仕方が身に付いたことです。これらが身に付いたことで、卒論発表会を無事に終えることができたのではないかと思います。そして、次期4回生の皆さん、研究を進めていく中でうまくいかないことは必ずあるとは思いますが、お互いサポートし合って、より良い研究になるように頑張ってください。(金澤陽介)



# 島津直道

卒論発表を終えて、私は「田中研究室で頑張ってきた良かった」と思っています。理由は大きく分けて3つあります。

1つ目は、Koroプロジェクトのリーダーとして活動した経験です。正直に言ってしまうと、リーダーの仕事が出来たとは思っていません。全員のスケジュールをしっかりと管理することが出来ていなかったし、その結果、新システムの実装が遅れることになってしまいました。しかし、卒論に集中する時期に入り、プロジェクトの中心が岡田さんに変わってから実装までの進捗が早く、少し悔しい気持ちになりました。岡田さんのプロジェクト成功させる姿勢から、システムを実装するまでに考えるべきことはどんなことを学ぶことができました。

2つ目は、就職活動中、自分が取り組んでいる研究や、研究室で取り組んでいるプロジェクトについて、胸を張って話すことが出来たということです。私は部活にも入っておらず、三年生まで特にこれと言って取り組んできたことがあまりなかったため、エントリーシートなどを書く際も、書きたかった内容を書くことが出来ませんでした。しかし、研究での内容を軸として考えたとき、自身が取り組んだ内容や何故それをするかと思ったりなど、書ける内容がどんどん出てきて、エントリーシートをしっかりと書くことができて、面接でも堂々と話すことが出来ました。自分が一生懸命取り組んだ内容が強い武器になるということを実感しました。

3つ目は、卒論発表に余裕をもって臨むことが出来たということです。田中先生のご指導のおかげで、卒論の執筆や卒論発表にしっかりと取り組むことが出来ました。卒論発表では緊張したが、途中からは話し方や視線を意識を向けることができ、身振り手振りを加えて話すことが出来ました。毎週の進捗発表が発表練習となり本番で活きたのだと考えます。私がいちばん頑張ったのは、発表当日の緊張感です。発表当日は、緊張感を持って臨むことが出来たと思います。この経験は他の研究室で出来なかった経験であると考えています。

三年生にも「田中研究室で頑張ってきた良かった」と思える1年を過ごしてほしいです。最後に、お忙しい中最後までご指導いただき、ありがとうございました。岡田先生及びいつも助けてくれた岡田さん、須谷さん、一緒に協力して頑張ってきた研究室の皆さんに感謝の意を表します。

(島津直道)



# 藤長新

研究室生活を振り返って私は3年後期に田中研に配属されました。Koro開発に不可欠なソフトウェアを通して簡単なプログラムングの講義を受けてから、初めの目標として3月の卒業生のための卒業式用Koroプログラムを作成することにしました。初めてのKoroの開発は難儀で、わからないことが多くありましたが、院生の手伝いもあり何とか形にすることができ、大変嬉しかったことを覚えています。次に、自分の研究テーマを決めを行いました。Koro開発をメインにしている研究室に配属されたのだから、Koroに関するテーマにしようとは決めていたので、研究テーマが決まったのは早かったです。田中

先生から研究テーマになりそうなもののリストを渡され、私は卒業生が開発した図書館案内システムの改良というものになりました。第一目標としては、夏休みのオープンキャンパスまでに形にするといったものでした。初めは何かから手を付けた方がいいからと難航しましたが、毎週の進捗発表で、

田中先生、院生、ゼミ生から助言を貰い、少しずつ形になっていきました。8月のオープンキャンパスまでには形にはなりませんが、とても「以前より改良できました」とは言えず、新システムのお披露目は断念しました。しかし、10月にもオープンキャンパスはあり、そこがラストチャンスと思

い、今まで自分が作成してきたものとは別のアプローチで新たにシステムを作成したのは作成できたと感じました。しかし、やはり卒業生が作成したシステムのほうが出来栄がいいとは心の隅で感じていました。そこから研究生、院生と細かく連携を取り、進捗発表で田中先生からも助言を貰いつつ、改良を重ねていき、無事完成させることができました。卒論発表会では緊張はありましたが、それほど苦労はせずに乗り切ることができました。これも毎週ゼミで進捗発表をしていたおかげだと思

## 研究室対外予定

2月19日まで、グランフロントで入場者カウンタ実演展示▼23日〜24日、ゼミ旅行(金沢方面)▼28日〜3月3日、田中教授、NCS P(グアム)で論文発表▼3月8日、女子栄養大学金子教授ら、体操システムの見学に来校▼17日、田中教授と岡田君、鹿児島大学で甲南・鹿児島コンピュータビジョン研究会に参加、発表

(藤長新)

# 橋本渉

1年半前、ゼミ配属され新しくシステム開発の方法やその他色々な新しいことを学びました。そして数ヶ月後ついに実際のシステム制作でした。院生の方々に力を借り、自分たちが関わってシステム制作の流れなどを勉強しました。コンポ

ネットを繋ぎ合わせた時、コントローラーからの入力でしたがKoroが動いた時にはすごく嬉しかったことを覚えています。その時のプログラムは、一部分を見ていくと簡単なことの積み重ねでその後の卒業研究に感じていたプログラム面での不安が少しだけ解消されました。

そして卒業研究の時期が来ました。研究室には馴染みのない様々なセンサーがありましたが、その中でLampotionは3年生前期のプレゼミで少しだけ触れたことがあったので、それを使いたいと思

いました。サンブルプログラムを動かして画面内の3次元空間にあるものに、センサーにより検知した手で触れることに惹かれ、Koroをそこに表示し触ると面白いのではないかと考え制作を開始しました。しかし3次元空間への表示は、色々な問題に悩まされ、うまくいかなかったため2次元空間に表示することに妥協しました。私の研究が本格的に始まったのはここからかもしれません。今となっては、判断がもっと早ければ良かったのかもしれないと少し後悔しています。この後は、色々問題はある

ましたが、それらを積み重ねるのが意外と難しく、出来てしまえば簡単な仕組みでもそれに引き着くまでに案外時間を取られました。そして最も思い違っていたのが、簡単と思っていたバグなどの修整でした。すぐに問題を見つけて治せるだろうと思

っていても、毎回毎回予想していたより時間がかかってしまい、結局最後の最後までギリギリになってしまいました。1年半を通して物事はなかなか上手くいかないこと

や、周りの方々の大切さなど本当に色々なことを学び、そして再確認することが出来たと思います。この卒業研究は研究内容だけではなく、それ以外の部分でもこれからの役に立つものになりました。田中研究室の皆さん1年半ありがとうございました。(橋本渉)

あれからゼミ合宿やKoroプロジェクトでも度々顔をあわせていた和田研と同じ組で行われました。他の研究室の内容も気になります。まずは自分の発表です。田中研の生徒から順に発表が始まっていきました。同期の発表が終わわり、いよいよ自分の番が回ってきました。緊張は最高潮に達して

いたのですが、何度もリハーサルを重ねたこともあり、目立った失敗もなく、あっという間の10分間でした。発表を終え質疑応答に入る時、ふと会場を見渡すと、田中先生がニヤツと笑っており、「まあまあ上手いこといったんだな」と安堵しました。こうして一年間、及ぶ、自分の卒業研究は幕を閉じました。実は田中研究室は、希望していたゼミ

## 編集後記

4回生のみならず、まずは卒論発表会お疲れ様でした。それぞれの個性が出て、とても良い発表だったと思います。学生生活は残り少ないですが、ぜひ後悔のない期間にしてください。さて、Koro研もメンバーがガラッと入れ替わってしまっています。みんな4回生のはじめの方は、どうやってKoroを動かせばいいのかわからないところから始まります。おそらく来年度もそうなると思います。ですが、できる限りそうならないように今のうちからフォローをしていきたいと思

(岡田航大)



っておられます。そして、1年後には僕もみんなのように自信を持って卒業していきたいと思

っています。1年半を通して物事はなかなか上手くいかないこと

や、周りの方々の大切さなど本当に色々なことを学び、そして再確認することが出来たと思います。この卒業研究は研究内容だけではなく、それ以外の部分でもこれからの役に立つものになりました。田中研究室の皆さん1年半ありがとうございました。(橋本渉)

あれからゼミ合宿やKoroプロジェクトでも度々顔をあわせていた和田研と同じ組で行われました。他の研究室の内容も気になります。まずは自分の発表です。田中研の生徒から順に発表が始まっていきました。同期の発表が終わわり、いよいよ自分の番が回ってきました。緊張は最高潮に達して

いたのですが、何度もリハーサルを重ねたこともあり、目立った失敗もなく、あっという間の10分間でした。発表を終え質疑応答に入る時、ふと会場を見渡すと、田中先生がニヤツと笑っており、「まあまあ上手いこといったんだな」と安堵しました。こうして一年間、及ぶ、自分の卒業研究は幕を閉じました。実は田中研究室は、希望していたゼミ

いたのですが、何度もリハーサルを重ねたこともあり、目立った失敗もなく、あっという間の10分間でした。発表を終え質疑応答に入る時、ふと会場を見渡すと、田中先生がニヤツと笑っており、「まあまあ上手いこといったんだな」と安堵しました。こうして一年間、及ぶ、自分の卒業研究は幕を閉じました。実は田中研究室は、希望していたゼミ

いたのですが、何度もリハーサルを重ねたこともあり、目立った失敗もなく、あっという間の10分間でした。発表を終え質疑応答に入る時、ふと会場を見渡すと、田中先生がニヤツと笑っており、「まあまあ上手いこといったんだな」と安堵しました。こうして一年間、及ぶ、自分の卒業研究は幕を閉じました。実は田中研究室は、希望していたゼミ